スタジアムの感染リスクは94%削減、残り6%は? Jリーグ

尾形有菜 スポーツ | 暮らし・学び・医療 | 速報 | 医療・健康 | サッカー

毎日新聞 | 2021/6/11 07:00（最終更新 6/11 07:00） 有料記事 1425文字

映像を使ったマスク着用率などの調査＝産業技術総合研究所提供

もう1年以上、サッカー・Jリーグの取材で目の前で選手の話を聞いていない。新型コロナウイルス下で動線は決められており、試合後はスタンドの記者席でパソコンを開き、オンラインで監督や選手に話を聞く。そんなJリーグは、スタジアムで感染リスクを94%削減できているとする調査結果を公表した。残り6%は何だろう。

原則的に観客を入れて試合を開催しているJリーグではこれまで、観客のクラスター（感染者集団）は報告されていない。

Jリーグは昨年10月以降、産業技術総合研究所（産総研）などと協力し、イベントの安全開催に向けた調査をしている。これまでスタジアム内の二酸化炭素（CO2）濃度やレーザーレーダーによる混雑具合の計測、選手・スタッフらが立ち入るエリアの密集・密接状態の計測などをしてきたが、今回は調査の「第3報」として、感染対策の効果について検証した。

調査対象は、4月3日のJ1名古屋―FC東京戦（愛知・豊田スタジアム）と同11日のFC東京―川崎戦（東京・味の素スタジアム）の2試合。いずれも人気カードで、1万5000人超の観客が集まり、スタジアムの3分の1が埋まった。

AI（人工知能）画像解析で確認したマスク着用率は2試合平均で94%。マスクをしていない子どもや、あごにかけただけの状態も「マスクなし」と認識される。これは過去に調べた計3試合と大差なかった。ただ、ハーフタイムは、飲食に伴いマスクを外す人が増えたため、83・5%に下がった。

産業技術総合研究所による感染リスク調査＝産総研提供

CO2濃度の計測では、客席やラウンジ等に「密」の状態は確認されなかった一方、トイレでは濃度が一時的に上昇した。レーザーレーダーなどを使った人の流れは、試合前のコンコースや試合後の退場ゲートで混雑が見られたが、試合後に選手がピッチを回ってサポーターにあいさつする速度を遅くすることで、観客の分散退場につながる効果が見られたという。

産総研によると、対策をまったく講じない場合の感染リスクを100%とした場合、座席の間隔確保、手洗い、消毒、マスク着用など現行の対策により、感染リスクは94%削減できているという。残る6%のリスクは、主にマスクを外した状態での会話と、マスクを着けていても防ぎきれない粒子を考慮した数字だ。さらにリスクを減らすには、マスクを外した状態で極力、話をしないことがポイントになるという。

また、JリーグはNTTグループとの調査結果として、スタジアムからの「直帰率」が55～67%だったと公表した。携帯電話の位置情報などを基に分析した「モバイル空間統計」から算出した。Jリーグのアンケートでは、試合後に家族以外と外食した割合は6～8%だったことも判明した。

産総研の保高徹生・地圏資源環境研究部門・地圏化学研究グループ長は「対策としてしっかり守られている印象。感染リスクが低い状態でサッカーの運営ができていることを確認した」と評価する。マスク着用の重要性を強調した上で、最も感染リスクが高まる場面を「飲食時にマスクを外してしゃべること」と指摘。今後の課題として、気温が高まる夏場に現状のマスク着用率を維持できるかどうかや、スタジアムの最寄り駅などでの「密」をいかに回避していくかを挙げた。

感染力の強い変異株が広まる中、Jリーグの村井満チェアマンは「常にバージョンを変えながら進化し続けていかないと、相手もどんどん変異を続けている。予断を許さず、対応していきたい」と話している。【尾形有菜】

毎日新聞のニュースサイトに掲載の記事・写真・図表など無断転載を禁止します。著作権は毎日新聞社またはその情報提供者に属します。
画像データは（株）フォーカスシステムズの電子透かし「acuagraphy」により著作権情報を確認できるようになっています。

Copyright THE MAINICHI NEWSPAPERS. All rights reserved.